

日本におけるサービス・ラーニングの展開Ⅱ

—— 東京都立A高等学校を事例として ——

Development of the Service Learning in Japan Part II

—— As a case with Tokyo Metropolitan Institute A High School ——

大東貢生・古川秀夫・柴田和子・大山治彦・富川 拓

要 旨

日本におけるサービス・ラーニングの展開として、東京都立A高等学校での教科「奉仕」の実際の導入と展開について、担当教員に対するインタビューに基づきまとめた。それによれば、A高校では、奉仕受講生徒全員を受け入れる外部セクターの存在から生徒・教員・外部セクターの3者の関係が良好であると考えられる。

キーワード：奉仕，サービス・ラーニング，都立高校

1. はじめに

サービス・ラーニングとは、地域社会のニーズに応じた社会貢献活動に学習者が実際に参加・参画することで、地域社会に対する責任感等を養う教育方法である（富川拓・柴田和子・大東貢生・古川秀夫 2007：9）。先行研究において筆者らは、日本へのサービス・ラーニングの展開を7つに分類し、また実践事例を見ることによって、課題として①学習の主体、サービスの提供側である「学生、大学」とサービスの受け手側である「地域住民、行政・福祉団体・NPO団体などの外部セクター」との間で、サービス・ラーニングに対する共通理解が形成できていない点、②日本でのサービス・ラーニングには受け入れ側、つまり地域住民や外部セクターに対してサービスを提供するという意識がない、もしくは薄いという点の2点を指摘した。

この小論で事例とする東京都立A高等学校

（以下A高校）の教科「奉仕」は、東京都教育委員会が平成16年4月に公表した「東京都教育ビジョン」の提言を受け、平成17年度の重点事業として「奉仕体験活動の必修化」が位置付けられ、平成19年度からすべての都立高等学校で東京都設定教科・科目「奉仕」を必修化したものである（東京都教育庁指導部高等学校教育指導課 2006：i）。

以下では、教科「奉仕」をサービス・ラーニングとして見たときに、先行研究でまとめた①サービス対象者とサービス提供者に同等の恩恵があるのか、②教育機関と行政・福祉団体・NPO団体などの外部セクターとの関係性、またサービス・ラーニングを受け入れる地域社会との関係性、③多文化共生や異文化理解との関係性、④市民性、特に東京都教育委員会のいう「生徒の規範意識を高め」「地域や都民が学校への理解を深め、学校への信頼をいっそう高めていく」（東京都教育庁指導部高等学校教育指導課 2006：i）ことにつながっているのかどう

かに注意を払いつつ、A高校の事例をまとめた¹⁾。

なお、A高校は、「奉仕体験活動」実践・研究校として、平成19年度の必修化以前の平成18年度から「奉仕体験活動」実践・研究校として応募を行い、すぐれた実践例として教育委員会から評価されているため、ここで取り上げた。

2. A高校での奉仕活動

A高校での教科「奉仕」は「奉仕体験活動」を科目名称として行なわれており、1単位35時間で構成されている。中間・期末考査最終日と夏休み、土曜日に実際の活動が行なわれている。行なっている活動は里山の保全活動として「外来種の駆除活動（里山での草抜き）」「田んぼ保全活動」「稲刈り」「ゴミ拾い」と学校近隣の清掃活動である。また事前学習として、パワーポイントによる学習、森林レンジャーを外部講師として、里山の歴史や保全の意義・注意点について学ぶことがある。さらに事後学習として、振り返りを行なっている。

3. 担当教員のインタビュー記録

2008年9月19日(金)にA高校において、進路指導部のB教諭にインタビューを行った。インタビューは半構造化の形式で実施し、ICレコーダを使用して記録した。その後記録した音声データをスクリプト化してまとめた。

3.1. 教科「奉仕」導入以前の状況

教科「奉仕」導入以前の、平成18年度に教科「奉仕」先行試行校に応募。当初は他の高校と同じく分散型で、A市のボランティアセンターを通して各老人ホームや保育園などに分散していく形式を企画。しかし生徒240人全員がやらなければならない、分散型が無理とわかった。A高校の場合は、都立公園の管理を指定管理者と

して委託されたNPO法人が、C丘陵整備のボランティアを恒常的に探しており、高校だけではなく小学校中学校、大人の方々のボランティアも随時募集していた。そこに連絡して240名全員を受けいれてもらえることに。NPO法人も管理委託初年度であり、A高校も集中型が始めてであるので、とにかく初めて同士という事で何事も話し合いをして進めて行くことになった。

3.2. 教科「奉仕」の運営

運営体制として奉仕活動推進委員会がある。A高校では進路指導部長が委員長。他の高校では、教務部長、進路指導部長や生活指導部長や教務部の主任クラスの先生たちが委員長をしている。年配の先生が担当であることが多い。

3.2.1. 奉仕活動の実践

奉仕を実践しているC丘陵の里山は、A高校から車だと5分、歩いて20分弱。高校から活動に行く時は歩いて。現地集合の時は駐輪場があるので自転車。主な活動は外来種の雑草取りと水稻の育成。公園は東京都が運営していた時には管理が行き届かなくて外来種の雑草が蔓延りかなり荒れていた。また里山の下に田んぼがあるが、農民の方が離れ一度潰れていた。

今年の活動は、かつての茶畑でかなりの広さにセイタカアワダチ草が生い茂っている所で3クラス入り外来種を全部取ることができた。雑草は根っこから抜かないとすぐに再生するが、高校生は丁寧に全部根っこから抜くところがすごい。だから彼らが入ったところは2年3年外来種が生えてこない。今、東京都側のC丘陵のA高校側はほとんど外来種が無くなりつつある。草抜きだけいつも頼まれる。「今年はこの辺り用意しますからお願いします」とか。

アレルギーの為に全く参加できない場合はプログラムを変えて里山民家の掃除などを行なう。いつも囲炉裏を焚いているので灰は毎日出る。

色んな子にやってもらっている。それから補習で竹馬作りとか、あとは空き缶に紐をつけて歩く遊具などを作ったりしていてそういう手伝いもしている。

あと稲アレルギーの場合は畑作業。畑も田んぼの周りがあるので畑の方をやってもらう。それから草アレルギーの子たちが出た時に民家の方に回して。

作業が出来ないほどの身障の方はまだ入学してきていない。入学した時には自転車の整理とかをやってもらう。仕事は作れば一杯あるから。

3.2.2. 教科「奉仕」の展開

－事前学習・事後学習－

事前学習として1年生の奉仕科目のオリエンテーション時に、最初に活動を行った年の写真などをパワーポイントで映し出して、「こういうことをやるんだ」と示している。今の2年生の中には昨年「早く田んぼに入りたい」と言っていた子もいた。みんなが楽しい顔をしているので。やり始めはみんな嫌だと言うが、途中から楽しくなっていった。写真も楽しいところばかり集めてるものもあるが、「そんなに辛くないんだ」という感じで。

事後学習では、その年にまた新しく撮った写真で構成してパワーポイントを流す。「こんな事やったね」と思い出して。思い出す頃には思い出が美化されている。あの暑い時に「虫が怖かった」とか忘れていたりして。

3.2.3. 評価システム

評価はA B C Dで。こちらが用意した履修を全部やったらB。フラッグダンス部とか剣道部なんかで他にもボランティア活動してる生徒がいて、それをカードに書き込んでいたら、その子たちはA。あと学校の与えられた中で「真面目に誰が見てもこの子はよくやった、人の倍は働いてた」という子にはAを付けている。同じ時間数やってもこの子はとにかくサボり続

けたと、あまりにも印象が悪い子はCとか。それと長欠なんかで出席が足らなかった子はDという事で結局修得無しですね、未履修ということで。Cが付くのはよほどの事。未履修になると、卒業できません。今の2年生から、奉仕を再度取らなきゃダメ。1年生と一緒にやり直さないといけない。

A取る子たちというのは、今の3年生がそうだけど、全部就職先とか進学先とかみんな合格。真面目さが全部出ちゃってる。1年生の時は全員に単位をあげるつもりで大体標準Bを付ける気である。ところが時々来なかったとかあまりにもさぼり方が酷かったとかだとCが付く。すると就職・進学で差がついちゃう。

3.2.4. リスクマネジメント

試行校をした時一番大変だったのは私たちが外に出かけてマムシとかスズメバチの危険がある時に保険に入らなかったこと。熱射病も入れない、学校の保険では。それでボランティア保険に入ろうとした。そしたらその当時は「学校の授業と自治会のボランティアはお断りします」だった。それで逆に都に掛け合った。教頭を通して。「こんな保険体制では生徒を外に連れ出せない」って。本当に自然が相手でしたから。とにかく生徒の身の安全を守るのが第一でした。

3.3. 教科「奉仕」が各々の

セクターに与える影響

以上のように、A高校では、教科「奉仕」を里山保全への全員参加（集中型）で行なって来ている。それでは次に、この教科「奉仕」が生徒、教員、高校、受け入れ先である外部セクターや地域社会にどのような影響を与えているのかについてみていきたい。

3.3.1. 生徒への影響

元々の方針が地域に根ざした学校作り。里山

にはA高校に近い人たちがボランティアで入っている。その人たちと一緒に高校生が活動する。例えば、秋の稲刈りは元々そこの田んぼを持っている人たちが集まって子供たちに農作業を教えてください。こうしたことを通して生徒全員が地域の人と触れ合ってる。

また、稲刈りをした時に初めてお米が出来る事、稲からお米が取れる事を知ったという子が随分いた。当たり前のことだけど「え、お米ってこうやって作るんですか」と。その次の一言が良かった。「こうして農民の人たちが一所懸命作るんだからこれからは大事に食べなくちゃ」なんて。田んぼで雑草取りをやる時に泥田の中に入る。すると子供たちはまた小さい子に返っちゃう。最後はみんな泥遊びやってる。それで稲の成長の役に立ってるんだから面白い気がする。

世界の動向というのでは、高校での奉仕活動を韓国とかイスラエルとかイギリスでもやっている。今、若者が地域の中で上手く自分の存在位置というのか価値というのか自分と地域の存在との関り方というのをあまり掴めなくて、そういう活動を通してなんとか自分が地域の一員なんだということを知ってもらいたいという動きが世界各国にあるようである。世界でも、最初の取っ掛かりはどうしても強制で始まるしかないみたいである。

「奉仕」を履修後に社会活動を進んでやったという生徒がいるというという事は聞いてない。ただ3年生に「総合学習」の時間で里山に行く講座がある。総合学習の一部で社会科の先生がせっかくそう言うところができただからということで1クラス、里山で色んな体験できる事、お手伝いをしながら例えば団子作りとか稲の刈り入れとか畑の手入れとか、色んな体験をしている。去年の3年生は1年生のときに行ってなかった。今年は1年生の時に里山に行ってた子たちが自ら希望してきた。とすると、去年と今年は全然取り組みの意欲が違う。だからそ

の効果は明らかに出ていると思われる。

1年生の時は強制だったけど3年生は選択。2年生は積極的に外には出ていない。しかし、アンケートではまた同じところに行ってやろうという子が40人はいたということ、全科目合わせると80人近くいたということはやはり大きな成果かなと思っている。

進路選択には繋がってると思われる。大学では今年何人か環境学科、農学部ではないけど環境学科へ3人ほど進学希望があった。去年は一人もいなかった。それが1年生の時の影響かなとも言えないが。キャリア意識については、分散型で老人ホームとか経験した生徒たちで「介護士になりたい」という希望の子は何人かでている。

3.3.2. 教員への影響

何か得るものがあるということ子供たちの方が動く。それに先生方が乗ってきた。肉体労働ですからね、最終的には教員も引率なので一緒にやらざるを得ない。すると先生と生徒が一緒になって汗を流す。こういうところから今微妙な感じで教員と生徒との間がいい関係になりつつある。今までは我々はただの授業の教授者で生徒は受け手というだけで構図が。やはり一緒に作業をやっているという事が。

また、授業面とかクラブ活動とかだけでは見えない生徒の面が見えてくる。意外とか弱そうな女の子が外来種の雑草取りに行くと意外なスピードでどんどん抜いて馬力を見せたりとか。クラブ活動やってる時はイカツイ格好をした男の子が虫に弱かったりとか。そういうことが一緒に行動することで見えてきた。

悪い面で言うと真面目そうに見えた子がああいうところに行くとか何もしないで逃げてばかりいるとか、そういう生徒が見つかる事もある。それはマイナスと言えばマイナス。逆に分かるからいい。教室でやってる時というのは教員が職員室に戻ったりする。ああいう場では教員と

生徒が同じ場所に居っぱなしなので、生徒の本性が見えたりする。返ってそれも良い事なんじゃないかと。文化祭なんかやっていたって実はクラスの中で半分の生徒はよく動いてるけど半分の生徒は結構サボってウロチョロしてるという。それが目の前で見えちゃう。「なんだこの子は結局やらないんだとか、あの子よくやるな」とか、全部見えちゃうから。

3.3.3. 地域社会への影響

公園側に一番喜ばれてるのが高校生の根こそぎパワー。向こうの人が高校生のパワーはすごいなと驚いていた。あれだけはお年の方のボランティアだとダメ。結局少人数だと刈るだけだから全然役に立たない。草抜きはとても体力が要るが、高校生はやっちゃう。人が多いから。今のところ丁度こちらの「やりたい、全員で参加したい」という希望と向こうの「ここを抜いてもらいたい」という希望とがマッチングしている。

管理をされてる公園の方もボランティアで地域の声になっている。稲刈りも雑草取りも他のボランティアが来ている。彼らはよく知っていて僕らに声をかけてくる。「今年の生徒さんよくやるね」とか、「あそこのクラス駄目だ」とか。それが若干評価に影響する事もある。

市民の人たちにも非常に好意的に受け入れられている。保護者の方は今のところ入学説明会の時に「ウチの奉仕は外に出てやる」と説明している。今のところ抵抗とか疑問はあまり聞いていない。

3.4. 教育委員会・東京都に対する要望

以上のように、担当教員のBさんにとっては、教科「奉仕」導入の2年間はかなりの成果があったと考えられている。そのBさんが問題にするのは東京都教育委員会の教科「奉仕」に対する態度である。

この前の実践校報告会で「机上で僕ら教員にやれやれというばかりでは無くて、指導する側、上も近くの高校生と一緒に活動をなさったらいかがですか」と発言した。都知事も行くべき。上であぐらかいてて教員にやれやれと指導するばかりじゃダメ。状況は何も変わらない。予算だっけろくに付いていないし、本当に「やれ」というだけ。だから僕が報告会でそれを言った時に会場に来ていた教員のみなさんがみんな拍手した。

それをやって今年は違って来た傾向が1つある。東京都教育委員会は都庁だけではなくて地域支援センターといって四箇所くらいに分散したが、この地区のセンターの人が私たちの活動する日に2日間一緒に来た。最初の報告会であれだけ白い目で見られたのに今は来てくれる人がいる。やはり少し変わってきたんだと思う。

東京都は押し付けが多かった。特に東京都知事のイニシアチブは大きかった。科目名も普通「ボランティア」が妥当だが、「奉仕」なんて名前になっている。だから教員の賛同者が最初は少なかったという苦労はあった。初めはあまり歓迎されなかった。校長は手を焼いていたようである。教育委員会はこっちに全部押し付けて、高みの見物だったから。

「無ければ無い方がいい」という先生はまだ何人か残っていると思う。科目が増えるのと同じなので負担増を教員は嫌がった。教員は「奉仕」の免許を持っているわけではないし。今は奉仕教員養成研修をやって担当する先生の時間を軽減しようという動きがやっと出てきた。いかに大変かという事がやっとわかってきたみたいで。最近の高校では、課外活動の顧問も業務になっているなど、加わるばかりでその片方でどこかを引こうという発想は無い。全部足し算でやっている。だから反発も当然出る。

それから一番中心になってお膳立てする教員にはもっと負担軽減をもらわないと。私一年の時に高校で大変だったのは全部やりましたから。

まず向こうの公園からのスタッフとの渉外でしょ。それから学校の中の指導でしょ、立案もするでしょ。加えて自分も担当クラスを持っているからクラスの生徒の直接指導がある。さらに一番大変だったのはその後に東京都の方から報告しろと言われるんですよ。報告もやらされるんですね。全部やらされて。嘘だろうと思うくらい。

私も色んな研修をさせられているが、その中でコーディネーターという方がいる。あの方たちはこぼしている。「どこかの学校に行っても担当の先生だけがあくせくしてるだけで、他の先生はみんな知らんぷり」だとか、「もっとひどいところはコーディネーターで行くと私たちに全部任される、下手すると生徒まで任される」という愚痴もあった。だからA高校の例が余程特異なケースみたい。「あそこは最初からコーディネーターも入らず独自でやっている」と。

都心の学校とか進学校は「書類だけ作って中身はほとんど無くてもやったことにしまえ」という感じで、かなり空洞化している。だから今やっている「総合」なら「総合」を無くす。その代わりに「奉仕」を入れるとかが無いと先生方の負担が増えるばかり。

4. まとめにかえて

以上、A高校の展開を担当教員B教諭のインタビュー記録から見てきた。B教諭によれば、A高校では奉仕受講生徒全員を受け入れる外部セクターの存在から生徒・教員・外部セクターの3者の関係が良好であると考えられる。ただそのための担当教員の負担軽減は「奉仕」の今後の展開のための重要な課題となっている。

今後は、教科「奉仕」の実際の活動への参与観察、あるいは経年観察を行い、生徒と教員、学校と地域社会といったセクター間でのメリット・デメリットについて考察していく予定である。

注

- 1) 東京都教育委員会での教科「奉仕」の導入については、富川・柴田・古川・大山・大東(2009)も参照されたい。

参考文献

- 東京都教育庁指導部高等学校教育指導課, 2006, 『「奉仕」カリキュラム開発委員会報告書～奉仕体験活動の必修化に向けて～』東京都教育委員会。
- 富川拓・柴田和子・大東貢生・古川秀夫, 2008, 「サービス・ラーニングの研究と実践をめぐる諸課題」『佛大社会学』32 佛教大学社会学研究会。
- 富川拓・大山治彦・柴田和子・古川秀夫・大東貢生, 2009, 「日本におけるサービス・ラーニングの展開Ⅰ～東京都立高校における必修科目「奉仕」の創設について～」『佛大社会学』33 佛教大学社会学研究会。

付記

この研究は平成20年度佛教大学個人研究助成、および平成20年度龍谷大学国際文化研究所研究プロジェクト助成の成果の一部である。

- (おおつか たかお
佛教大学社会学部准教授)
- (おおやま はるひこ
四国学院大学社会福祉学部准教授)
- (しばた かずこ
龍谷大学社会学部・国際文化学部非常勤講師)
- (ふるかわ ひでお
龍谷大学国際文化学部教授)
- (とみかわ たく
聖泉大学人間学部専任講師)